

令和 5 年 5 月 10 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11631

研究課題名（和文）スポーツのインテグリティを実現するスポーツ倫理教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Sports Ethics Education Program for Sports Integrity

研究代表者

梅垣 明美（Umegaki, Akemi）

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：00389660

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：ドーピング、暴力、八百長など、現代スポーツを取り巻く問題状況は深刻さを増している。このような中、スポーツ倫理教育プログラムの開発と学校教育への適用が求められている。筆者は、これまで基礎的研究として、定説とは異なるフェアプレイの成立過程を明らかにしてきた。これは、新たなスポーツ規範の可能性を示唆するものであった。また、現代スポーツが抱える諸問題を倫理的観点から論じ、その問題点と対策を提案してきた。本研究では、これら一連の成果を発展させ、新たなスポーツ規範に基づくスポーツ倫理教育プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代スポーツが抱える諸問題の解決に向けて、昨今、オリンピック・パラリンピック教育を通して、スポーツの価値教育が行われている。しかし、これらは、現代批判されているスポーツマンシップなどの対人倫理に基づくスポーツ規範を教えているという問題点が認められる。これらの問題解決には、新しいスポーツ規範に基づくスポーツ倫理教育プログラムの開発が必要である。本研究では、次世代である中学生および高校生を対象としたスポーツ倫理教育プログラムの開発をめざす。そのことを通して、日本人のスポーツにかかわる高潔性を育成するとともに、その高潔性を次世代へと引き継ぐことを可能とする。

研究成果の概要（英文）：Problems in modern sports, such as doping, violence, and match-fixing, are becoming more and more serious. Therefore the development of a sports ethics education program and its application to school education are required. As basic research, the author has clarified the establishment process of fair play, which is different from the established theory. This suggested the possibility of new sports ethics. In addition, I have discussed various problems of modern sports from an ethical point of view, have proposed the problems and improvement. The purpose of this study is to develop a series of these results, develop a sports ethics education program based on new sports ethics, and verify its effectiveness.

研究分野：スポーツ科学、身体教育

キーワード：スポーツ倫理 規範意識 フェアプレイ 共生 体育理論 チームづくり

1. 研究開始当初の背景

ドーピング、暴力、八百長など、現代スポーツを取り巻く問題状況は深刻さを増している。このような中、スポーツ倫理教育プログラムの開発と学校教育への適用が求められる。

昨今、現代スポーツが抱える諸問題の解決に向けて、オリンピック・パラリンピック教育を通して、スポーツの価値教育が行われている。しかし、ここには、2つの問題点が指摘されている。第1に、現代批判されているスポーツマンシップなどの対人倫理に基づくスポーツ規範が教えられていること。多様化、複雑化している現代スポーツの諸問題には、対人倫理であるスポーツマンシップでは対応しきれないという批判がある(友添, 2017)。第2に、Education 2030で求められる知識、スキル、および、価値観の育成には至っていないことである。

これらの問題解決には、新しいスポーツ規範の創造と、Education 2030で提案されている能力の育成をめざすスポーツ倫理教育プログラムの開発が必要である。しかし、中学生および高校生を対象としたスポーツ倫理教育プログラムの開発は進んでいない。

そこで本研究では、スポーツマンシップなどの対人倫理に基づくスポーツ規範にかわる新たなスポーツ規範を創造し、新たなスポーツ規範に基づく中学生および高校生を対象としたスポーツ倫理教育プログラムを開発する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第1に、スポーツマンシップにかわる新たなスポーツ規範を創造すること、第2に、新たなスポーツ規範に基づく中学生および高校生を対象としたスポーツ倫理教育プログラムを開発すること、第3に、開発したスポーツ倫理教育プログラムの効果を検証することであった。

3. 研究の方法

(1) 新たなスポーツ規範の創造

新たなスポーツ規範を創造するため、第1に、スポーツ規範に関する先行研究を分析した。第2に、倫理学や社会学などスポーツ科学以外の研究分野の情報を収集し、整理した。具体的には、サンデルに代表されるコミュニタリアンの思想、エリアスのフィギュレーション理論などを参考にした。第3に、これらの分析を踏まえ、新たなスポーツ規範を創造した。

(2) スポーツ倫理教育プログラムの開発

対人倫理に基づくスポーツマンシップにかわる新たなスポーツ規範に基づくスポーツ倫理教育プログラムを開発した。中学生および高校生を対象とするため、中学校および高等学校の体育理論の授業に導入可能なプログラムを作成した。1回50分の体育理論の授業で完結できるプログラム、あるいは、体育理論と実技を組み合わせ、1回目(50分)体育理論、2回目(50分)体育理論、3回目(50分)実技というプログラムを開発した。

(3) スポーツ倫理教育プログラムの効果検証とその活用

中学生の体育授業にスポーツ倫理教育プログラムを導入した。スポーツ倫理教育プログラムを導入した体育授業の前後に、生徒のスポーツに対する意識変容を問う質問紙調査を行った。さらに、中学生および高校生、あるいは、高等学校の部活動指導者に対して、スポーツ倫理教育プログラムに関する授業あるいは研修を行った。

なお、研究期間の2年目である2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、授業実践の対象である中学校および高等学校の学校閉鎖、および、感染拡大対策がとられたため、授業研究を計画通り進めることが難しかった。そのため、新たに開発したスポーツ倫理教育プログラムの効果検証に加えて、スポーツ倫理教育プログラムの一つとして開発していたASKSモデルの効果検証も実施することとした。

4. 研究成果

(1) 新たなスポーツ規範

現代スポーツが抱える問題は、多様化、複雑化しており、従来のスポーツ規範である対人倫理に基づくスポーツマンシップでは、解決できない問題が生じている。例えば、賭博や八百長は、選手個人の問題ではなく、選手同士、選手が所属するチーム、審判、大会運営者などを巻き込む組織的な問題となっている。賭博や八百長については、従来からあった選手個人の倫理規範であるスポーツマンシップに依拠しては到底解決できない問題状況の広がりや複雑化が見受けられる。友添(2017)は、現代スポーツにおける非倫理的問題の広がりに対応するものとして、「スポーツのインテグリティを守る」という考え方を提案した。

筆者は、これまでスポーツマンシップの醸成、あるいは、近代スポーツの成立をキリスト教思想との関連から明らかにしてきた(梅垣・友添, 2002; 梅垣, 2003, 2006, 2020)。しかし、これら一連の研究は、スポーツマンシップの醸成について、定説を超えるものではなかった。これら定説を超える理論として、筆者は、エリアスのフィギュレーションの視座から新たなフェアプレイ論を提案した(梅垣ほか, 2014)。

本研究では、これらを踏まえて、新たなスポーツ規範を考える前提として、スポーツを選手あるいはチームのパフォーマンスの優劣を競う場として捉えるのではなく、スポーツを選手、監督・コーチ、観客、大会運営者、タスクペイヤーなどスポーツに携わる全ての人々の「互敬を基

盤とする相互依存的な共同の営み」として理解することを提案する。スポーツをこのように理解することにより、スポーツの高潔性を、選手個人の倫理規範としてのスポーツマンシップあるいはフェアプレイにのみ求めるのではなく、スポーツに関係する全ての人々の関係性の枠組みの中で、言い換えれば互敬を基盤とした相互依存の中でスポーツの高潔性を求めることを提案するものである。すなわち、新たなスポーツ規範は、スポーツに携わる全ての人々に関係性のパラメータの中でスポーツの高潔性を担保することが求められる。具体的には、スポーツを個人の優越性を誇示するための道具としてではなく、人類が豊かで幸せに暮らすための崇高な文化として、スポーツそのものの高潔性を担保すること、勝敗の行方に加えて、選手、監督・コーチ、観客などの褒め称えられるべき言動に注目することなどが考えられる。

(2)スポーツ倫理教育プログラムの開発

新たなスポーツ規範に鑑み、スポーツにおける「共生」を考えるスポーツ倫理教育プログラムを考案した。中学校第3学年の体育授業を対象に、3時間単元（体育理論2時間、実技1時間）の内容を構想した。

1時間目は、体育理論「人々を結び付けるスポーツの文化的なはたらき」の中で、スポーツにおける共生について考える授業を行った。具体的には、第1回オリンピックでは女性が参加できなかったが、男女平等という観点からオリンピックへの女性選手の参加が増えていること、しかしながら、スポーツ界にはまだ男女平等とはいえない事実が残っていること、東京オリンピック・パラリンピックでは、男女平等に向けて、男性の競技種目と女性の競技種目の数を同じにする動きが認められること、男女混合競技が導入されることなどについて情報を提供し、それぞれの事象が意味することについて話し合った。授業の最後には、ゆるスポーツの動画を視聴し、スポーツにおける共生について意見交換を行った。

2時間目は、1時間目に学習したスポーツにおける共生をもとに、共生を実現するスポーツを考案させた。クラスを6グループに分け、各グループで、共生を実現する新しいスポーツを考案させ、授業の最後に発表させた。

3時間目は、実技の授業として、2時間目に考案した新しいスポーツを実際に行い、それぞれのスポーツについて、良い点、改善点などを話し合った。

各授業では学習カードを用意し、生徒のスポーツに対する意見の変容が分かるようにした。

(3)スポーツ倫理教育プログラムの効果検証とその活用

スポーツにおける「共生」を考えるスポーツ倫理教育プログラムの効果

中学校第3学年の体育授業2クラスを対象に、スポーツ倫理教育プログラムを導入した。実施時期は、2021年2月末から3月上旬の3時間であった。

授業後、生徒全員が差別は良くないこと、誰もが楽しめるスポーツを考案することの大切さを理解したこと、単に男女平等というのではなく、お互いの違いを認めて役割分担をする社会が成熟した社会であることなど、授業を通して理解したことを書いていた。

ASKSモデルの効果

ここでは、梅垣ほか(2022)をもとに、ASKSモデルの効果についてまとめることにする。中学校第1学年の体育授業5クラスを対象に、スポーツ倫理教育プログラムであるASKSモデルを導入した。実施時期は、2020年9月上旬から2020年10月下旬であった。

ASKSモデルの介入を行わない単元のデータを収集するためベースライン単元(10時間)と、ASKSモデルの介入単元(9時間)を実施した。ASKSモデルの効果を検証するため、ベースライン単元前と、介入単元前後の3回、仲間づくりの形成的評価票および情動的知能質問紙を調査した。

表1は、仲間づくりの形成的評価の平均値、標準偏差、一元配置分散分析、及び、多重比較を示している。ASKSモデルを導入した体育授業では、仲間づくりの形成的評価の得点が有意に高まった。生徒たちは、介入単元後には、チームのみんなと課題を達成し、お互いに意見を出し合い、メンバーとの一体感を感じていたこと、また、互いに励まし合ったり助け合ったりしていたと感じ、そしてダンスの授業で行った活動に満足していたことが示された。

表1 仲間づくりの形成的評価の平均値、標準偏差、一元配置分散分析、及び、多重比較

	ベースライン単元		介入単元				F	多重比較 Bonferroni p<.05
	ベース前		介入前		介入後			
	M	SD	M	SD	M	SD		
集団的達成	2.58	0.46	2.47	0.53	2.77	0.39	41.49 ***	ベース前>介入前; ベース前, 介入前<介入後
集団的思考	2.68	0.40	2.59	0.46	2.76	0.36	16.61 ***	ベース前>介入前; ベース前, 介入前<介入後
集団的相互作用	2.60	0.52	2.29	0.59	2.61	0.45	58.48 ***	ベース前>介入前; 介入前<介入後
集団的人間関係	2.55	0.50	2.25	0.60	2.64	0.49	75.43 ***	ベース前>介入前; ベース前, 介入前<介入後
集団的活動への意欲	2.84	0.36	2.66	0.48	2.73	0.38	20.81 ***	ベース前>介入前, 介入後; 介入前<介入後
合計	2.65	0.31	2.45	0.39	2.70	0.29	84.93 ***	ベース前>介入前; ベース前, 介入前<介入後

n=312

*** p<.001

表2は、情動的知能調査の平均値、標準偏差、一元配置分散分析、及び、多重比較を示している。ASKSモデルを導入した体育授業では、自分の感情の表現能力、相手の感情の認知能力、自

分の感情の制御能力、及び、全体的な情動的知能の得点が有意に高まった。すなわち、ASKS モデルには、生徒たちへの効果として、相手の感情を適切に読み取り、感情をコントロールしながら自分の感情を上手く表現する能力を高める効果が認められた。

表2 情動的知能の平均値，標準偏差，一元配置分散分析，及び，多重比較

	ベースライン単元		介入単元				F	多重比較 Bonferroni p<.05
	ベース前		介入前		介入後			
	M	SD	M	SD	M	SD		
自分の感情の表現能力	11.90	2.76	12.09	2.68	12.51	2.78	18.32 ***	ベース前<介入前<介入後
相手の感情の認知能力	12.93	2.15	12.83	2.08	13.04	2.28	3.04 *	介入前<介入後
自分の感情の制御能力	11.76	2.50	11.52	2.56	12.07	2.64	15.57 ***	ベース前>介入前, 介入前<介入後
全体的な情動的知能	36.58	5.15	36.44	5.11	37.63	5.29	25.57 ***	ベース前, 介入前<介入後

n=320

*p<.05, ***p<.001

本研究では、新たなスポーツ規範に基づくスポーツ倫理教育プログラムとして、スポーツに関係する全ての人々の互敬を基盤とした相互依存的な営みを可能にすることが求められたが ASKS モデルは、スポーツに参加する者たちのコミュニケーションを活性化する効果が認められた。

スポーツ倫理教育プログラムの活用

スポーツ倫理教育プログラムの啓蒙活動として、以下の研修などを行った。2020年度は、コロナ禍ではあったが、近畿圏内にある2つの中学校の保健体育教師、および、中学校、高等学校の保健体育教師をめざしている近畿圏内の2つの大学の学生に、開発したスポーツ倫理教育プログラムを紹介し、実践を促した。2022年度は、高等学校の部活動指導者、および、学校関係者以外の人々に対する啓蒙活動として、S市内在中の小中学生、あるいは、高校生を対象に、スポーツ倫理教育プログラムを実施し、開発したプログラムの啓蒙活動を行った。

引用文献

- 友添秀則 (2017) スポーツ倫理学の基礎知識。友添秀則編，よくわかるスポーツ倫理学。ミネルヴァ書房，pp.2-19。
- 梅垣明美 (2003) スポーツの近代化と良心の近代的形成に関する研究序説：ブルジョアの宗教倫理に着目して。奈良女子大学人間文化研究科，18:291-299。
- 梅垣明美 (2006) 筋骨たくましいキリスト教徒のスポーツに対する態度に関する研究。浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要，6:185-196。
- 梅垣明美 (2020) スポーツにおけるキリスト教文化の影響：スポーツとスポーツマンシップ。現代スポーツ評論，42:64-71。
- 梅垣明美・大友智・上谷浩一・ウエイン・ジュリアン (2014) 前近代におけるフェアプレイの検討：N.エリアスのフィギュレーションの視点を手がかりとして。体育学研究，59(2):513-527。
- 梅垣明美・白井麻子・古藪直樹 (2022) 生徒の情動的知能を育む体育授業の検討：中学校第1学年のダンス単元を対象として。総合文化研究所紀要，39:104117。
- 梅垣明美・友添秀則 (2002) Sportsmanship の解釈に関する研究：チーム・スピリットとキリスト教の関連に着目して。体育・スポーツ哲学研究，24(1):13-23。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 劉佩・梅垣明美・高本恵美	4. 巻 60巻
2. 論文標題 中学校課題活動におけるサッカー指導に関する日中比較：指導者のインタビュー調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪体育学研究	6. 最初と最後の頁 39頁～52頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石居宜子・梅垣明美・曽根純也	4. 巻 34号
2. 論文標題 サッカーのゲーム発達様相における発生運動学的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スポーツ運動学研究	6. 最初と最後の頁 105頁～118頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32261/bewegungslehre.34.0_105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梅垣明美	4. 巻 42
2. 論文標題 スポーツにおけるキリスト教文化の影響：スポーツとスポーツマンシップ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代スポーツ評論	6. 最初と最後の頁 64 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 杉本光子・梅垣明美	4. 巻 23
2. 論文標題 チームワークの高まりを感じるハードル走の授業：ASKSモデルの導入を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育授業研究	6. 最初と最後の頁 31 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 皆川峻一・梅垣明美・高本恵美	4. 巻 65
2. 論文標題 大学生生活用に向けた部活動志藤に関する実践的研究：高等学校ボート部を指導事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 981 996
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5432/jjpehss.20073	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Umegaki,A., Otomo,S., Ueta,K., Fukada,N.,Yoshii,T. and Miyao,N.	4. 巻 17
2. 論文標題 A Study of an Instructional Model (ASKS Model) in Physical Education to Improve Social Skills: Focusing on Team Organization	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Sport and Health Science	6. 最初と最後の頁 98-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5432/ijshs.201905	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 比嘉靖・梅垣明美・村上なおみ	4. 巻 58
2. 論文標題 中学校の体育授業への責任学習モデル導入に向けた検討：保健体育科教師へのインタビューを通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪体育学研究	6. 最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅垣明美・白井麻子・古藪直樹	4. 巻 第39巻
2. 論文標題 生徒の情動的知能を育む体育授業の検討：中学校第1学年のダンス単元を対象として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 総合文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 104-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅垣明美	4. 巻 第30巻第2号
2. 論文標題 人と人がつながるとは—聖書が教えるマコトのつながりに向けて—	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スポーツ社会学研究	6. 最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 皆川峻一・梅垣明美
2. 発表標題 責任学習モデルが中学生の社会的責任目標に及ぼす影響について
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第40回大会, WEB大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古藪直樹・白井麻子・梅垣明美
2. 発表標題 ダンスの指導経験が浅い教員を対象としたリズムダンス教材の開発
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第40回大会, WEB大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷本和昭・梅垣明美
2. 発表標題 互いの良さを認め合いながら協働して学ぶ集団をつくる体育授業：チームづくりモデルの導入を通して
3. 学会等名 第23回体育授業研究会愛知大会, 日本福祉大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉本光子・梅垣明美
2. 発表標題 チームワークの高まりを感じるハードル走の授業：ASKSモデルの導入を通して
3. 学会等名 第23回体育授業研究会愛知大会，日本福祉大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村上なおみ・梅垣明美
2. 発表標題 バスケットボールの体育授業におけるフレックスオフェンス導入の試み：中学生を対象として
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会，慶応義塾大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉 佩・梅垣明美
2. 発表標題 中学校の運動部を対象としたサッカー教育に関する日中比較：指導環境および活動状況に着目して
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第39回大会，早稲田大学
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大友智、梅垣明美、深田直宏 他10名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 310
3. 書名 小学校指導法シリーズ「小学校指導法 体育 改訂第2版」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------